

玉ねぎ 3 分の 1 個と小数の倍

レシピを見ると玉ねぎ 3 分の 1 個とか 2 分の 1 個といった表現が頻繁に現れる。つまり、何個という表現の際に分数を用いることは、日常的にはよく見られるということになる。

個数として分数を用いてよいのであれば、小数だって用いてよいはずである。もしも「2.3 個」といった小数の個数はダメだという人があれば、分数ではよくても小数でもダメな理由を明確に説明するか、「3 分の 1 個」といった分数の個数を普通に用いる料理業界に対してクレームを入れるべきであろう。

そうした人も「平均 2.3 個」という表現はよいようであるが、ではこの時の「平均 2.3 個」とはどのような意味なのであろうか。[平均の場合](#)だけにしろ、「2.3 個」がどのような意味なのかを明確にしなければ、「平均 2.3 個」がどのようなメッセージを伝えているのかはやはり理解できない。

基準の大きさの「2.3 個」を 2.3 倍などとして[小数倍](#)を考えれば、2 つ分、3 つ分を 2 倍、3 倍と言うとする小学校第 2 学年の学習と同じ感覚で小数倍も考えることができる。それにより、「[意味の拡張](#)」などと大げさなことを言わなくても[小数をかけるかけ算](#)も扱えるし、[倍と基本的に同じものとして割合](#)も扱える。結果として、算数全体の議論も[シンプルに済む](#)ように思う。「2.3 個とは言わないが、平均 2.3 個はよい」といった使い分けもしなくて済む。その利点が大きいのであれば、「2.3 個」といった小数の個数を算数では認めないと、大した根拠もなく言い張るよりも、「2.3 個」とはどのようなことを規定し、「風船 2.3 個はちょっと変かも」といった適用範囲に注意を向けながらも、小数の個数を認めた方が算数全体の学習としてはメリットが大きいのではないだろうか。

なぜ未だに「2.3 個とは言わないから」といった考えがまかり通るのであろうか。

【[算数・数学教育における IAQ に戻る](#)】